
ウチシャケ

ネムリンコフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウチシャケ

【Nコード】
N5577V

【作者名】
ネムリンコフ

【あらすじ】
ぼくはミチコを探しに森へ出かけた

ミチコが迷子になったというのに、捜しに行こうという大人は誰もいなかった。だからオイラは、一人でミチコが行ったっていう森へ夜中に行ったんだ。ちょうど晩飯の時間だったから、かーちゃんが台所に向かつてる隙にそつと玄関からでてきちゃった。

外はもう随分暗くて寒くて、こんな時間に外へ出たのは初めてだったから、オイラも随分心細かった。でも、ミチコのことを考えると怖がつてる暇なんかないって気になって、村のはずれの森まで走っていったんだ。

十分は走った。全速力で休まず走りっぱなしだったから、流石のオイラも森に付く頃にはぜえぜえ息を切らしてたよ。それでも、ミチコのことを考えると休んで入られなかったから、直ぐに森の中に入って行ったんだ。

森の中は真っ暗だったよ。昼間はあんなにきれいな緑色だった木の葉っぱがどれも真っ黒になっていて、いつも遊んでたあの森とはまったく別人みてえだった。

でも、オイラは進んでいったよ。月も星もない夜だったから、前も後ろも真っ暗闇さ。躓いて転んだり、木の枝に頭をぶついたりしながら、大声でミチコの名前を呼んだよ。

そうしたらさ、おいらの声と葉っぱが風でざわざわする音のほか何にも聞こえなかった暗闇のずつと向こうのほうから、聞こえるか聞こえないかぐらいの小さい声で、確かにミチコの声が聞こえたんだ。オイラは声のするほうに向かって全速力で走ったよ。また何度も転んだり木の枝に頭をぶついたりしたけど、とにかく走った。

しばらくしたら、それまで続いてた森が急になくなって、灰色の曇った空が頭の上に見えたのさ。

オイラの直ぐ前の地面は草もなくなつて、真っ黒いつるんとした床が広がってた。そのとき風が急に吹いて、そのつるつるした床が

ゆれて、そいつが湖の水面だつてことに気が付いたんだ。でも、おかしいんだよ。なぜかっていうと、オイラはよくその森で遊んでたんだけど、池も湖をみたことなんていちどもなかったんだから。

不思議に思つてばけーつとその湖の周りを歩き回つていると、いきなり、今度ははつきりとミチコの声が聞こえてきたんだ。「ダイスケ、ダイスケ、ダイスケ。ウチはここや、はやくきてや」つて。

オイラも大声で叫んだよ。

「ミチコ！ ダイスケやで！ どこにいるんや！ おとうもおかあも心配しとるで！」

そうしたら、湖の波が段々激しくなつて、ミチコが水面からゆつくりと出てきた。

オイラがびっくりして何も言えないでいると、ミチコが「ごめんなあ、ダイスケ。ウチほんとはシャケなんや。そんでな、もうこの村にはおれんのか」

ミチコはなきながらさういうと、どおん、つていう音がして地面が大きく揺れて、湖の水がいきなり噴出してミチコを包み込んだ。水はそのままミチコといっしょに空にぐんぐん上がつて、消えていつてしまった。後に残つたのは地面にぽっかりとあいた大きな穴だった。

後になつて俺は気が付いたよ。ミチコは俺の父ちゃんとやつてたんだなつて。それで産卵が終わつて、オイラに妹が生まれて、いたたまれなくなつたミチコはまた海に飛んでつたんやなつてな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5577v/>

ウチシャケ

2011年10月9日13時27分発行